

を与えるのではなく、言語活動を促すよう誘導するのである。一度にあまり計画を多く持つと、それは幼児たちに不可能になつてくる。研究会当日には、ことはを幼児たちが、途中適所にさしはさむ場面はほとんどなかつたが、一度にそこまでは要求できない。「お話をきく。登場するものを話し合う。動作に表現する……」ここまでくると、幼児には興味の持続時間に限度のあることを考える。要求を高く多く持ち過ぎては逆効果になつてしまうこともある。次の機会にもついくなり、さらに多くことばの入るものは、年令的にもう少し後の時期に計画すればよい。

以上は、お話を音楽から入った場合であるが、このほかに紙芝居からも導入してみた。「ひよこの散歩」「あめふり」を実際に使用してみたが、題材をよく選択すれば、この方が視覚にも訴えるので登場するものがはつきり意識できるのか、話し合いも発言が活発であるし、導入しやすいかも知れない。この場合は、教師が介在して、表現するときに紙芝居

の全枚数の中から場面をしづかに表現しやすいうように、まとめることが必要である。まだ、他の導入法もあると思うが、今回、私の実際に試みたことについて記してきた。

言語指導といちがいにいっても、幼稚園生活においてはことに、その領域が固定されていない。私が、今回、言語に重点をおいた生活の中でというはつきりした共通テーマから、こうした題材を選んだのも、四才児の初期という年令的条件を深く考慮して、結果としては、言語活動を直接的に促していない一見、リズム劇への導入ともみられたかも知れないが、ただ、ことは(せ

りふの意も含む)を劇あそびの中で重視して考えるのでなく、人の話を聞いたり、話しあつたり、考えたり、発表したり、とう言語活動の広範囲な面の指導が重要な点であるとえたからである。はじめにも述べたのであるが、社会的な働きを持つ言語は、個人で持っている語いとか、ことばの価値以外に、人との接触である社会において価値を發揮するものでなくてはならない。言語指導であつても、友だちといつしょの場面においても発表すべきときには発表できるように、いろいろな場面から考慮したい。結局は、幼児の心理をよく理解し、心理面からの解決や指導も一方では頭においておくことが必要であるといえよう。

## (五) オ 児)

# ラジオの聴取活動とその発展的あそび

村 石 京 子

一、聴取活動の教育的意義  
まず問題となるのは、ラジオの聴取活動は、どのような教育的意義を持つかといふ

点である。小学校では、学習指導の中に視聽教材としてラジオを広くとり入れているし、幼稚園でもところによつてはかなり

以前からラジオの聴取を行なっている。いっぽう、ラジオの放送番組をみると小学生向の学校放送もあるし、児童を対象にした児童の時間も組まれている。ラジオは子どもの生活から離れたものではないのである。しかし幼稚園でラジオを利用する際に

は、他の教材の採択と、同じくそこに明らかな教育的意義がなければならない。そのためには、まず子どもたちがラジオを喜んで聴くかどうかということが先決問題となる。言いかえれば、他の保育教材を扱うのと同じく、児童が楽しんで、喜んでラジオを聴くならば、すでに一番肝要な目的は達成されていることになる。なぜならば、子どもがラジオに明らかな興味を抱いている場合、子どもはそこで放送される物語や情報を理解しようとするし、事実また、子どもなりの理解のしかたをしてしまる。

## 二、聴取活動の最適年令

一口に児童といっても、三才児、四才児、五才児の年令の開きはひじょうに大きい。ラジオを幼稚園で教材として取り扱う際、

どの年令に最もふさわしいのであろうか。もちろん個人差のことを考えなければならぬが、組の大半のものが喜んでラジオを聴く能力をそなえた状態というのは何才であろうか。これについては、私の指導経験を語らねばならない。

三才児においては、母親や教師の話でさえも、一方的な話では理解できない。子どもはしばしば「それは何なの」とか、「どうしてそうなったの?」などと話の途中で相手をさえぎり、理解をおぎなうための注釈を求めている。また幼稚園などでは、絵とか手による表示とか、実物を与えるなどによって教師は子どもに理解を助けるよう補助教材を与える工夫をしている。ストーリーもごく単純な楽しい話、そしてリズミカルな反復の多いやさしい表現を好むこの年令の子どもを対象としたとき、私はラジオを教材として扱う以前に、もつともつと三才児らしいものを、三才児らしい喜びを、と思い、するべきことがありすぎて、

ラジオを組の中にとりいれる余地は見出せなかつた。四才児はお話を聞くのがとても好きである。

四才児においては、紙芝居がいい、やって」と、皆の目がいきいきと輝いてくる。誰かがまっ先に笑い出すと、つづいて皆がわっと笑い出した。いつもだまつて無表情にしているYちゃんもにこにこして一生懸命きいている。こわいところへ来た。「すると」と、と言つて言葉を切ると、皆かたずをのんで次のことばを待つてゐる。真剣そのものの表情。話が山を通り越すと、ホッとひと安心してほほがほころぶ。「きょうのお話はこれでおしまいとなると、それからがまた大騒ぎである。「もつとして」「もつと、もつと」「今のでいいからもう一度」「新しいお話がいい。」やつとのことで「また明日ね」と約束してうちきる。そして視聴覚教材として幻燈を取り扱つたときの喜びはまたひとしおであった。このような状態にあつたとき、ラジオの「児童の時間をきく」とを思いついた。けむつたような五月の雨のつづいたある日、皆でいつしょにラジオを聴いた。新しいものが部屋にもちこまれた好奇心も加わ

つて、子どもたちは喜んで聴きだした。内容は皆のよく知っている浦島太郎であった。しかしものの二、三分もたつと始めた調子はどこへやら、皆あきてしまったようすがれきせんとなり、室内はざわついてしまった。このようすから四才のはじめの年令では、機械を通して送られる話、すなわち聴覚だけの働きを要求するラジオ放送は、まだ年令的にみて高度なのではないだろうかと考えられた。しかも比較的知能も進んでいるTちゃんが海の音をきいたとき、「あのラジオの箱の中には水が入れてあるのかな、それでザーザーっていう音が出了のだろう。先生、いつ水くんで来て入られたの?」ときかれたとき、まだこの年令の子どもには、ラジオ放送設備というものが十分理解できない、子どもの生活には遠いということをしみじみと感じた。

そこでここしばらくはラジオは扱わないでおこう、まだその時期でないからと考えているうちに、やがて夏・秋と過ぎて三学期になつた。冬期の保育は、比較的室内にこもつている時間が多いものである。製作など前日からのつづきや、グループによる

協同作業などをおこなつてゐるうちに、誰ともなしにうたい出すのが「一丁目一番地」であり「赤胴鎧之助」であった。もちろん幼稚園では一度も出てこないはずの歌である。そして幼稚園でとりあつかう歌より歌詞も長いが、誰かがうたい出すとほとんどの子どもがそれに和してうたうのであつた。またあるとき、お話をしたおりに、ラジオできいた話でよいかという提案があつた。一丁目一番地の話を昨日はここまでだつたと言つて話す子どももいるし、子どもの時間でできた童話を一生懸命思い出しながら話してくれる子どももある。それがあつた。二丁目二番地の話を今日はこの

○放送教育の活用を、主として教育内容における言語指導の実際にむすびつかせるという意図から、幼児の時間の聴取をおこないだした。はじめは、ラジオに親しませるのが目的で幼児の時間の放送をかけておくと、それに興味がある子どもが三々五々と集つてきてくるという形態をとつていて。しかしやがてその人数も増え、子どもの中から幼児の時間を楽しみにする声も出てきたので、皆でいっしょに楽しんできくことのできる指導へもつていつた。

○毎週火曜・水曜におこなわれる「お話を

てこい」の番組をもつとも興味深くよく話題にしてゐるようと思われた。そこできいたままにしないで、あそびに再現さ

### 三、五才児の指導計画と実際

学期が新たになつて子どもたちは年長組になった。五才児の年間計画をたてるにさ

せていくようにしたいと思い、きいた話を自分達で再現してあそぶ段階へと発展させるようにすすめた。表現力をゆたかにし、発表力を増進したいという目的から、つぎのような指導計画を考えた。

1 ラジオできいた話をすじをおつてもう一度発表しあう。  
2 お話を紙芝居につくる。

3 劇化して子ども自身がその役になり、せりふを言ってあそぶ。  
4 ペーパーサートをつくってあそぶ。

5 人形芝居をしてあそぶ。

○右のような方法でラジオをきいたあとでの経過からつぎのようない評価の観点をたてることができる。  
1 子どもたちはラジオ放送をよろこんできく態度や習慣ができるか。  
2 きいた話をたやすく理解しているか。  
3 きいた話を人にわかるよう発表することができているか。

4 放送教育は言語生活をゆたかにするのにやくだっているか（発表する力や、表現活動が、この計画をやりだしてか

らのぞましい方向へ進んできているか。）

#### 四、指導の反省

五才という年令において、幼稚園における言語生活の中でぜひとも習得しておきたのが、聞くことと話すことである。個人を対象にした一対一の話し合いももちろん大切であるが、ここで五才児に要求したいのは、集団の中においての聞くことの態度であり、話すことの能力である。これは子どもにとつてなかなか困難なことがらであるが、いずれかといえばきくことの方は、ともかくもインタレストを基盤におくことによって早期に習得できるよう思う。しかし、より一層むずかしいのは集団の中で話すということである。今まで機会のあることに生活発表などを中心にしてその場面を多く作ってきたが、生活発表などによる個人的な話題の提供だけでなく、むしろ五才児という集団の中で組全体の共通の話題による話し合いによって、楽しんで発表

ブによって紙芝居につくったり、また劇化してせりふのやりとりをしたり、ありあわせの指人形に配役をつけて人形芝居にしたりして、そこにさまざまの発展的活動がつけられるように工夫していく。五歳になつて一学期間こういうあそびを比較的回数多くとりあつかうようになってから、ずいぶん発表する力や表現がのびてきたようと思われる。そこには客観的な評価をたてるものさしはないけれど、子どもが楽しんで話せる場面を多く作ったということは少くとも全体としてプラスの方向に動いてきたであろうと見える。

しかし最後につけ加えたいのは、ラジオをきいた後いつもこのような発展を望むといふのではけつしてなく、むしろ番組の中には子どもたちにのぞましい情緒的な反応をひき起してくれただけで十分であり、とりたてて何らの事後指導を考えない方がよいという場合もある。むしろ、喜んできく、正しくきくということだけで、すでに放送教育というものの使命の大半は果されているからである。（お茶の水女子大学付属幼稚園実際指導研究会より）